

# ニュースレター

*News Letter*

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE, Kanto Gakuin University

## 教養としてのキリスト教

### —横浜の教養の担い手としての研究所—

学長 小山 巖也  
Yoshinari Koyama

就任以来、「課題は教室・研究室ではなく社会の中にある」と言い続けてきました。社会には大中小様々な課題が存在しており、その課題を取り巻く人々がいます。そうした課題を知り、人々の気持ちに思いを寄せ、なぞを解き明かすのが学問であり研究だという話です。

サステナビリティが叫ばれる時代、課題は多様で複雑なものとなっています。それ自体を理解することが難しく、したがって、現場に足を運んだとしても、簡単に課題を理解することは出来ません。また、課題解決には異なる専門領域を持つ者との協働も不可欠であり、そうした人々と意思疎通を図る必要も出てきます。

だからこそ、今、教養が非常に重要になってくるのです。課題を構造的に理解し、課題を取り巻く人々の思いに共感するためには教養が必要です。パラダイムの異なる人との協働は教養を介して行われます。他方で、その課題に自分はいかにして取り組むのかということを考えるためのベースとしても教養は不可欠です。課題解決に取り組むための自己の確立に寄与するからです。

さらにいえば、課題理解に際しては教養としてのキリスト教の理解も必要となります。近代化は西洋化であり、キリスト教の世界観と切っても切れない関係にあります。現代の課題の多くは近代化が生み出した影に当たるもの。近代を超克するためには近代化の思想的背景を知る必要があります。

このように考えたときに、キリスト教を基盤として総合的な研究を行う「キリスト教と文化研究所」は、本学にとっての教養の担い手として、とても重要な存在であることがわかってきます。深く研ぎ澄まされた研究を重ね、学内外に広くその成果を発信していくことを大いに期待するところです。

1つお願いがあります。開港以降、横浜の発展において外国人居留者たちの果たした役割は大変大きいものでした。そして、そこにはキリスト教が深くかかわっています。さらに言えば、関東学院の源流の1つである横浜バプテスト神学校の貢献もあったことでしょう。関内キャンパス開設という、いわば創設の地への回帰を契機に、ぜひ、横浜の発展とキリスト教・関東学院の関係についても研究を進めていただきたいと思います。



## 「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ

豊川 慎(理工学部)  
Shin Toyokawa



「キリスト教と日本の精神風土」研究グループでは、客員研究員の先生方の発題を中心にオンラインにて研究会を行っている。2022年度は全3回の研究会を予定しており、2月の現時点で2回の研究会が開催済みである。以下、第1回目と第2回目の研究会の概要を報告したい。

第1回研究会は2022年6月25日(土)16時から18時半まで行われ、今年度より新規客員研究員として本研究グループに加わった岡部一興氏(本研究所客員研究員、弘前学院大学客員教授)により「聖書とヘボン」と題する発題がなされた。

ヘボン (James Curtis Hepburn, 1815-1891) は1859年10月に北米長老教会の宣教医として来日し、医者としての働きのみならず、日本で最初の和英辞典『和英語林集成』の編纂と出版、ヘボン式ローマ字で知られるローマ字表記の考案、ヘボン塾とその後の明治学院の初代総理、そして聖書翻訳事業など多くの功績を日本に残した。とりわけ、聖書翻訳委員会の中心的人物として、聖書翻訳に多大な貢献をしたことが詳しく紹介された。1872年9月に第1回宣教師会議が開かれ、共同訳聖書の翻訳が決議され、共同訳による聖書翻訳が1874年3月から開始された。ヘボン、S.R. ブラウン、D.C. グリーン の3人が訳業に従事、補助的援助者として、奥野昌綱、松山高吉、高橋五郎が与えられ、翻訳事業の会議と作業はブラウン邸で行われた。新約と旧約聖書の両方の和訳に携わったのはヘボンただ一人であり、岡部氏によれば、新約聖書27巻と旧約聖書39巻合わせて66巻のうち、新約聖書の73%、旧約聖書の50%がヘボンによって訳されたという。翻訳に際して難儀したのが、キリスト教に固有の用語をいかに訳すかということであった。例えば、キリスト教の「神」は、中国のビリジマン、カルバートソンが訳した新約旧約聖書からヒントを得て、「上帝」の訳語から「神」という言葉に訳すことにしたという。第二に、漢文にするか、平仮名にするか、仮名まじりにするかという文体の問題があった。ヘボンは聖書は誰もが読めるものでなければならぬと考え、「標準語」で仮名まじりの文章にすることを主張したという。ヘボンは33年もの長きにわたって横浜に留まり、日本宣教に尽くし、近代日本における文化と学術に大いなる貢献をなした

ことが詳しく報告された。参加者は15名。

第2回研究会は10月29日(土)14時から16時半まで行われた。岡部氏と同じく今年度より本研究グループに加わった熊田凡子氏(本学教育学部准教授)により「キリスト教保育の果たした役割—パンデミック1920年代前後のJ.K.U.の活動の継続性に関する考察を中心に」と題して発題がなされた。

熊田氏によれば、1906年に設立された「日本幼稚園連盟」(Japan Kindergarten Union, J.K.U.)は教会や学校に付設されたキリスト教幼児教育施設の教育充実のためにキリスト教幼児教育に関っていた外国人女性宣教師たちによって創設された協議会であり、A.L. ハウが初代会長を担った。現在のキリスト教保育連盟の前身にあたるJ.K.U.の目的は「幼い子どものための仕事を効果的に進めるため、在日外国人保育者が相互に話し合い、連携し合う」ことであった。1920年代前後の様々な保育園・幼稚園での事例が詳しく説明され、キリスト教保育の果たしてきた役割および現代のキリスト教教育・保育に示唆される点として、熊田氏は、子ども1人1人の育ちを家庭のことも含めて尊重し支えるまなざしが保たれていたこと、地域の親子にも繋がる活動を伝道的役割として進展させてきたこと、幼稚園での様々な交わりが教会と繋がってきたことなどを指摘された。参加者は8名。

岡部氏と熊田氏の発題を通して、近代日本におけるキリスト教教育が果たした役割の大きさをあらためて考える機会となり、それぞれの発題後には活発な質疑応答がなされた。

第3回研究会は2023年3月18日(土)に開催予定であり、鳴坂明人氏(本研究所客員研究員、アレセア湘南高等学校宗教主任)による「内村鑑三におけるキリスト教道徳論の特質」と題する発題が予定されている。

「キリスト教と日本の精神風土」研究グループでは今後も引き続きオンラインでの研究会の開催を続け、ゆくゆくはシンポジウムの開催や論集の刊行を目指して研究会を継続していきたいと考えている。研究会のさらなる充実と活性化のためにも「キリスト教と日本の精神風土」というテーマに関心があり、当研究会への参加を希望される方は是非ご連絡頂きたい。 toyokawa@kanto-gakuin.ac.jp

# 関東学院大学シェイクスピア英語劇公演活動の キリスト教学校における存在意義

瀬沼達也(元関東学院大学シェイクスピア英語劇 演出主幹)  
Tatsuya Senuma

関東学院シェイクスピア英語劇公演活動は、学校の特色となる行事として1948年に関東学院女子専門学校(関東学院女子短期大学の前身)で始められた。1956年に大学と共催となり、2001年、同短期大学の大学人間環境学部への改組により、2003年には大学主催となり現在に至っている。

活動期間は毎年3月上旬から12月上旬までの約9ヵ月間で、活動時間は約600時間、参加学生の平均人数は約40名である。ほぼ全学部の有志学生が参加し、キャストとスタッフに分かれて役割を分担し、共通の目標である公演の成功に向けて、各自の能力を生かし、協力し合って活動する。

この公演活動の主要な特色は三つある。

- ① クリスチャン劇作家・シェイクスピアの戯曲だけを原語上演すること
- ② 演劇教育活動であること(大学行事のため毎年、実行委員会が組織され、教職員構成員が指導する)
- ③ 公演活動が社会的に評価されていること(日本の大学で最も長い歴史と伝統を有する)

本学にはシェイクスピア劇を原語で上演する歴史的意義がある。1885年、横浜山手に建造された劇場「横浜ゲーテ座」で1891年に日本で初めて英国劇団により*Hamlet* 全幕が原語上演された。その同時期の1884年、同じ山手の地に、シェイクスピア存命中にロンドンで誕生したバプテスト教会を源流にもつアメリカ・バプテスト教会の宣教師たちにより創設された横浜バプテスト神学校が、関東学院大学の第一の源流だからである。

加えて本学の建学の精神はキリスト教であり、その精神を端的に表す校訓は「人になれ 奉仕せよ」である。また本学の教育の目的はキリスト教に基づく人格の陶冶である。クリスチャン劇作家・詩人であるシェイクスピアの戯曲を創造する過程および公演を通してキリスト教の精神と普遍的世界観・価値観を学び、集団による演劇創造活動を通して人格の陶冶を目指すところに、この英語劇活動と大学の理念・目的との連関性がある。また国際語である英語を使った身体



2005年第54回「テンペスト」公演舞台写真

・感情表現により生きた言語習得が図られ、国際性の涵養がなされている。この活動は、参加学生にとっては生きた奉仕教育(建学の精神の具現化)の場となっており、社会にとっては学外公演が観劇する市民に対しての文化的貢献となっている。

〔注〕ただし、2020年～2022年までは、コロナ禍のため感染対策上、公演活動が制限され、対象観客限定による学内公演等となり、同公演編集版映像を毎年年度末にYouTubeで配信した。時間、人数等はコロナ前の数。実行委員会構成員：教職員、学生代表。



関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501横浜市金沢区六浦東1-50-1  
TEL: 045-786-7873 (研究所直通・月～金9:30～17:00)  
FAX: 045-786-7806 (研究所直通・24時間受付)

発行者：石渡 浩司  
Director: Hiroshi Ishiwata